

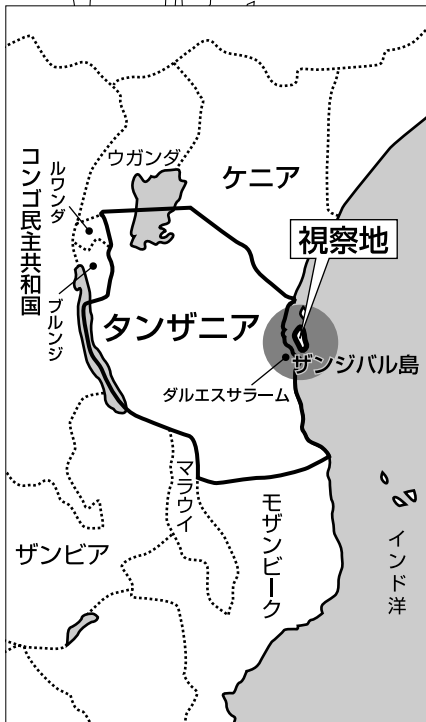


タンザニア ザンジバル

(財)日本ユニセフ協会学校事業部では1995年から用途を指定できる指定募金を設定し、全国の学校に協力を呼びかけています。最後の拠出を終えた指定募金プロジェクト「ザンジバル・島に安全な水と健康な生活を」について、先生方を対象に、プロジェクト視察を目的としたスタディツアーを実施しました。

タンザニアはウガンダ、ルワンダ、ブルンジなど新聞、テレビで取り上げられることの多い国々と隣接した東アフリカの国です。国境周辺には、近隣諸国で頻発している紛争から逃れて来た人びとが住む難民キャンプがあり、一種の緊張感が漂っています。しかし、その首都ダルエス・サラームから約50キロ北東、インド洋に浮かぶザンジバルでは、そのような雰囲気は全く感じられません。ウングジャ島とペンバ島と呼ばれる2つの島からなるザンジバル。今回はザンジバルの人口の58%が住むウングジャ島で、指定募金でご支援いただいた「学校を中心とした水と環境衛生事業」を視察しました。

ウングジャ島の中心部、ザンジバルタウンはヨーロッパからの観光客のメッカ。観光客向けのリゾートホテルやレストラン、民芸品店が立ち並びます。一瞬、開発途上国にいることを忘れてしまいそうな賑わいですが、ここで生活している人びとにこの恩恵があるわけではありません。衛生的な水が飲める人は57%、トイレが使用できる人は67%にすぎません。この割合は農村部に入るとさらに低くなるのです。



緑豊かなクローブ農園

香辛料の生産地としてその名を知られるザンジバル。「スパイス・アイランド」と呼ばれ、アラブ商人がここを中心に、ヨーロッパやアジアにたくさんの香辛料を輸出した時代もありました。最近安くて高品質の東南アジア産におされ、以前ほどの活気はありませんが、クローブ(ちょうじ)の輸出による外貨獲得が群を抜いていることには変わりはありません。市場に行くとバスケットに溢れんばかりのクローブ、胡椒、ウコンなどが並べられ、独特の香りをふりまいています。

ザンジバル・オールドタウンに近い漁港



島を横断する幹線道路沿いには、果物や野菜をつくる農園が続きます。しかし、比較的肥沃な地域はウングジャ島西部に限られており、他の地域は地盤が固かったり、土地がやせていたりして農作物が思うように育ちません。こうした地域では漁業が人びとの生活を支えています。

タンザニア ザンジバル

みなさまからの募金で、ザンジバルの学校35校で本格的な調査が行われ、その結果、特に状況の悪かった11校で井戸やトイレの建設が始まりました。ザンジバルではトイレを使ったり、食事の前に手を洗ったりという習慣がなく、そのため、多くの子どもたちが伝染性の眼病や回虫に苦しんでいます。いくら給水・衛生施設をつくっても、今までの生活習慣を変えなければ、子どもの健康状態が改善されることはありません。島の人びとに衛生的行動を習慣化してもらえるような環境を整えるため、ユニセフでは学校に通っている子どもたちに対して衛生教育を始めました。この子どもたちが、学校で得た知識を家庭や地域に持ち帰り、最終的には地域全体に衛生観念が広がるのがねらいです。



新設された
井戸を使う
子どもたち



2万リットル
入る貯水用
タンク



学校のあちこちには衛生に関するメッセージが見られます。子どもたちが勉強している校舎の壁にも、手洗いを奨励するメッセージがイラスト入りで書かれています(左上の写真)。イスラム教の影響で、モスクでの礼拝の前に水で体を清める習慣はあるものの、石鹸を使って手洗いをするまでにはいたっていません。知識を知識だけに終わらせず、行動に移す。ユニセフの支援活動の中で一番時間のかかるところですが、少しずつ変化が見られてきました。

「治療より予防」と書かれたトイレ(左下の写真)は最近ユニセフからの支援で改築されたものです。なかなか広まらなかったトイレ使用の習慣ですが、昨年のコレラの大流行をきっかけに、その効能が広く知れわたることとなりました。トイレを使えばコレラが防げる。ユニセフの言葉に人びとが耳を傾け始めたのです。

チャラウェイ小学校の子どもたちは、自分たちで薪集めをして15000シリング(約3300円)をトイレ建設のために寄付しました。「自立を促すユニセフの支援」が子どもたちの中に確実に育っている証です。「私たちのトイレ」という意識が、その後の衛生教育への積極的参加につながります。



しかし、1000人以上の子どもが通うこの学校では、トイレの数がまだまだ不足気味です。そこで村人は自分たちでトイレ用の穴を掘り始めました。ところが地盤が固いため、1週間で1メートルほど掘れたにすぎません。トイレを作るには最低8メートルの深さは必要ですので、あと7週間掘り続けなければなりません。こうした不利な条件の中で地道に自立の努力が続けられています。

ユニセフは劇や歌(右の写真)を通じて衛生に関する知識を広めています。劇中、伝統的な医療信仰を曲げない祖父をやんわりと批判し、「これはマラリアという病気だから、今すぐ医者に行って、薬をもらわなければ娘の命があぶない」と説く母の姿が描かれています(左の写真)。こうしたエピソードが何編も組み込まれていて、



見ている子どもたちも真剣そのもの。その他にも果物は洗ってから食べる、食事の前には手を洗う、などの「新しい」衛生観念が紹介されています。その新しい衛生観念をめぐる年長者と家族の意見の対立も描かれており、古いものが常に正しいわけではないこ

とへの理解を求めています。どんなに学校で衛生観念を習得しても、家庭内で実権を握っている祖父母の理解が得られなければ、古くからの習慣を変えることはできません。人びとの考え方や行動を変えるには、大変な時間と労力が必要です。